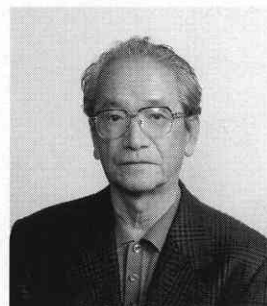


西千葉—六本木の 40 年

東京大学名誉教授 (元第 4 部教授)

西川 精 一



生研が来る 1999 年で創立 50 周年を迎えることとなったとのことですが、お目出度うございます。人生は流るる水の如しと言われますが、本当に感無量です。

私が昭和 17 年 4 月に東京帝国大学第二工学部冶金学科に入学し、昭和 55 年 4 月に停年で退官するまで約 40 年近い間研究教育両面で生研に在職していました。その間生研の名前も第二工学部から、工学部分校、生産技術研究所と変り、場所も西千葉から東京都港区六本木へと移りました。

西千葉の新築木造校舎は真新しい姿で松林の中に並び、本郷とはまた異なった開放感に満ちていましたが、西風の強いときは黄砂が吹きよせ、実験に使ったガルバノメーターなども、机の上で砂埃をかぶっていたのを思い出す。

在職中は「生産研究」を大いに利用させていただきました。(Vol.3, No.10, 1951) が最初で、(Vol.22, No.4, 1970) まで大略 30 回ほど投稿しております。最初の論文の題目は「アルカリ金属を含む鉛軸受合金」で加藤先生と共著、最後は「Cu-3% Ti 合金の復元現象について」でした。

大学 1 年の応化の菊池先生の講義で「エントロピー」の説明をしていただいた時には、全く迷路に入ったようで、大学の学問とはこのように難しいものかと驚かされました。このエントロピーの概念は、私が退官の記念出版で「金属工学入門(1)」をアグネ出版から出してもらうことになった頃にうすぼんやりと理解できるようになった。

研究の方は東北大学の方から兼任で来ておられた大日方一司先生の指導で、軽金属と有名な非鉄磁製合金 Cu-Al-Mn 3 成分系のホイスラー合金の状態図の作製であった。ホイスラー合金には中間相が現れ、完全な状態図の作製は困難であった。その後は加藤正夫先生の指導で軽いアルミ合金と重い鉛合金の研究を続けた。鉛の研究は世の中にやる人もほとんど居ない状態であったので、ヘソ曲りの私には適していたのかも知れない。

私達第二工学部冶金卒の第 1 期生は、毎年の正月に新日鐵の小田急参宮橋にある山谷寮に集まり、旧交をあたためている。入学時 40 名だった仲間も現在は 25 名になってしまった。

まさに我々の青春時代は、大東亜戦争—広島・長崎の原爆—東京大空襲—終戦と続き、嵐しと混乱の時代であった。麻布六本木における私の居室は、裏門に出るスロープの隣にあった。その居室でぼんやりと窓外を眺めている時だけが不思議に思い出される。

終戦直前に結婚した私は、今 3 人の子供と 8 人の孫を持つ傘寿間近の老骨となり、江戸川サイクリングロードを走り、釣りを楽しみ、月 4 回市ヶ谷の日本棋院でのザル碁を楽しむ日常生活を送っている。

戦争で死んでいった仲間を思えば、私は幸運に恵まれた人生を楽しんだ一人であろうと考えねばならない。

その内一度生研を訪れて、若い方々の研究の方向や、事務の方々とも旧交を温めたいと考えています。